

写真：増山健太郎 文：徳永宗士



森林が動く人々や釜を握る人々のために作られたジーンズ。「丈夫なスポン」がなければ、金銀採りもできぬ……だったに違いない。



ジーンズが著書「売れ出し」の、リーバイ・ストライプだった。

昭和時代に使われていた糸つみ器。中座の姿勢で綿を打っていた。

### バイカーを魅了し続けるMOM&POP、LANGLITZ、FLAT HEADといったジーンズも岡山で誕生していた。

【Padded kevlar pants】  
4万7250円 サイズ：28~36  
タウンユースも兼ねた細身のシルエットが特徴的なパッドパンツ。右側のベルトループには真鍮のDリング、フロントポケットには真鍮のチェーンジップが取り付けられている。〈Langlitz Japan ☎052-734-6918〉



【Denim-Straight (VB-005)】  
2万790円 サイズ：27~38  
岡山で生地を織り込み、色、質感、シルエットなどのすべてがオリジナルのデニム。MOM&POPのスタンダードモデル。〈VINTAGE BLUE ☎052-734-6916〉



【BIKER STRAIGHT (Lot. 1015)】 2万5000円 サイズ：25~34・36・38 16オンスデニムを使用したストレートモデル。股上が若干浅めのシルエットだが、ほど良い太さで履きやすいスタイル。オリジナルの鉄製ボタン、銅製リベットを使用している。〈※サンプルのため実際の商品とは異なります〉 〈フラットヘッド ☎026-275-6666〉

**繊維の町・KOJIMA**  
THE TOWN OF TEXTILE / KOJIMA'S HISTORY

- 1. 米作の代わりとして綿作りがスタート  
児島の綿織にまつわる歴史は、江戸中期にまでさかのぼります。18世紀初期、日本全国で綿織の興隆がはじまりに行われた。この児島でも手織製法が受け継がれ、しじり、もとはは織った土産物。土が豊かになり、綿作はもたらされ、綿織の代わりとして綿作りがスタート。綿作を興え、農作業の忙しさが伝わり、綿織の歴史がはじまりました。
- 2. 綿を使った製品作り  
児島で採れる綿が、当時、高品質として知られており、綿づくりはますます盛んになっていきました。そして1798年、児島の口(たのち)で真鍮ひもの生産が始まりました。真鍮ひものは、平たく織った木綿のひもで、刀の鞘や、鏝(ようり)のひしなど武器に使われていました。19世紀半ばになると、真鍮ひもの生産は次第に(ひし)の生産へと移って行きます。ほかにも、ランプの、グランド、ほかろ糸など、綿を使った当時の日用品や日用品でよく作られるものも作られていました。
- 3. 学生服の町、児島  
明治時代に入ってからとびとびの生活が西洋化したことで、足踏の需要は下落して行きます。代わって児島の主力産業となったが学生服でした。地場で作られる学生服は、品質の高さから関東圏へも注文が入り始めます。児島の学生服の品質の高さから、その品質の高さを認めた学生服の専門店が作られ、学生服の町として知られるようになります。こうして児島の学生服は、大手メーカーが全国の子供のウェアをまとめるまでに成長していったのです。
- 4. 日本のジーンズの聖地へ  
1955年、学生服や作業服を製造していた児島のマホが、綿織が盛んなジーンズの特長を生かして、高品質の生地を生産する第一号の学生服の生地、高品質の生地を生産する第一号の生地を生産することになり、綿織の歴史がはじまりました。高品質の生地を生産することになり、綿織の歴史がはじまりました。高品質の生地を生産することになり、綿織の歴史がはじまりました。



1970年、日本で初めて女性用ジーンズを生み出した「ベティミス」。当時の作業風景を物語る写真の数々。月日を超えて今に伝えたい光景だ。



70~80年代頃の縫製現場。当時工場で働く作業員の95%は女性だったという。住み込みで働いていた女性も多く、工場の2Fなどに部屋を設けていた。



ジーンズの歴史が詰まったミュージアムには、数多くの古い資料やレアな写真が所蔵し、展示されている。日本を唯一のジーンズ資料館である。



### ジーンズの歴史を語るミュージアム

柏 卓美。株式会社「ベティミス」開発部。同社が建てた「JEANS MUSEUM (岡山県倉敷市児島下の町5-2-70 TEL086-473-4460) はジーンズの歴史を見ることができるスポット。2Fではオリジナルジーンズのオーダーも可能。



### 時代に翻弄されながらも国産ジーンズが生まれた街、児島。

デニムのルーツを語る上で切っても切り離せないのが「綿」である。そのルーツをたどると約4000年以上前から栽培されていたインドにまで遡る。綿花栽培に適した気候風土……そしてそれはアメリカも同様だった。当時の時代背景も相まって一大ビッグビジネスとなった綿花はインディゴ染料との出会いを経て、ジーンズとして大量に生産されるようになったのだ。さらに丈夫で長持ちする「ジーンズ」を確立したのもアメリカだった。カリフォルニアの山中で見つかった金鉱……まさにゴールドラッシュで殺到した移民たちがこぞって求めたパンツこそが、今のジーンズの源流となっていく。いくつもの偶然が重なるように、馬具に使われていたリベットを両側のポケットに打ちつけた。そうして進化を遂げていくジーンズも、30年代に入ると大きな転換期を迎える。それまでの作業着としてのイメージを、荒野が広がる大西部のイメージに近づけていった。その波は西部劇ブームで加速する。カウボーイたちが履いていたジーンズは熱狂的に若者の間に浸透していった。50年代になると再びアメリカ全体がますますな社会風潮が巻き起こる。ジーンズ・デザインとマリオン・ブランドの2人が起こしたそれは、当時の人々の中に確固たるヒーロー像を作らせた。反骨精神にも似た反体制のイメージは、多くの若者たちの共感を惹く。ジーンズを普及させていく種火とみる。その頃の日本では高度経済成長の発展もあり、米よりも現金になりやすい綿花作りが各地で行われるようになっていた。この児島も例外ではなかった。雨の少ない気候により、米作りよりも綿の栽培が強化されていた。やがて付加価値の多い足袋などの生産に移行し、その流れに沿って学生服や作業服、そしてジーンズの密着販売から販売の展開へとという道筋が形成された。のどかな瀬戸内の潮騒が響く岡山県の児島が、後に国産ジーンズ発祥の地と呼ばれるようになる礎は築かれたのだ。戦後の日本は綿花の輸入もままならない状況で、50年頃の東京には約7000軒もの中古衣料の店が存在していた。特にアメ横などには当時のファッション感覚を刺激するものが多く、評判が評判を呼んで発展を遂げる。やがて高度経済成長を迎えた日本人が手にした。それがゆとりだった。そのゆとりこそが国産ジーンズの生産へ取り組む姿勢を社会全体に生んでいった。時代とともに変遷をたどるジーンズはどこへ向かうのか……。